

# 特集にあたって

鈴木正美

人文学部「〈声〉とテキスト論」研究プロジェクトならびに新潟大学コアステーション「〈声〉とテキスト論研究センター」は、前研究代表者の高木裕教授の主導により、ボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」と共同で「声・テキスト・制度に関する比較総合的研究」に取り組んできた。2011年以降、「モデルニテ」（研究代表：エリック・ブノワ）と密に連携しながら、さまざまなワークショップやシンポジウムを開催してきたが、中でも2015年3月15日に開催したシンポジウム「抒情詩と〈声〉」は、これまでの研究成果の集大成ともいうべきものだった。

本シンポジウムのエリック・ブノワによる基調講演「声のリレー（系譜学—現象学—目的論）」において、ブノワは詩が3つの段階から成り立っていることを考察した。まず、テキストの上流における声の「起源」が揺動する場所としての「エクリチュール」の段階（「系譜学」あるいは考古学）。次に、テキストの進行中に詩的な声を発話する「人物」について、すなわち詩の中において語っている「フィギュール」の段階（声の「現象学」）。そして、テキストの下流において、詩の声がテキストを前にした「受容者」の声になる「レクチュール（読む行為）」の段階（声の「目的論」）である。こうした3つの段階について、ボードレールやジェアン・リクテュスのテキストを分析しながら、具体的な抒情詩の中の「声」とは何であるのかを深く考察し、これまでの研究を見事にまとめた内容だった。

さらに第2部のワークショップではロシアの詩（鈴木正美）、アメリカの詩（平野幸彦）、韓国の詩（藤石貴代）、フランスの詩（高木裕）について、抒情詩の生成において〈声〉がいかなる作用・機能をしているかがさまざまな角度か

ら考察され、「〈声〉とテキスト論」研究が今後もさらに重要であることが明瞭になった。

今回のプロジェクト特集は上記のエリック・ブノワの講演原稿をもとにした論文を中心に、「声」とテキストをめぐる興味深い論考によって構成されている。

エリック・ブノワの論文「声のリレー（系譜学—現象学—目的論）」は、抒情詩における〈声〉が前言語領域で生成し、テキストの中で発話する人物がそれを受け取り、そして読者が引き継ぐことによって永遠に再現動化されるという声の継承のプロセスを記号論や読書行為論を援用しながら考察している。

齋藤陽一の論文「日本におけるスタニスラフスキー・システム3」は、文字テキストを音声に変換するものとして、スタニスラフスキー・システムを考えるというスタンスで、今回は久保栄の仕事を捉え直している。これにより1950年代当時における日本のスタニスラフスキー・システムへの理解がどのようなものだったのかが明らかになった。

鈴木正美の論文「戦時下ソ連のジャズと大衆歌謡における『声』」は、1930年代の歌謡曲が主に国策歌謡であったのに対し、独ソ戦を挟んで第2次世界大戦下の歌謡曲では、まったく個人的な感情から書かれた詩が公の個々の感情を代弁する言葉となったこと、個人の内面の「声」が民衆すべての「声」となり、「戦争という物語」を共有するようになったことを考察している。

高橋早苗は論文「親子の愛情表現としての「愛し（かなし）」—『竹取物語』と『うつほ物語』の特異性—」において、上代と中古にのみ活躍し、その後消えていった「愛し（かなし）」という愛情表現について考察している。平安文学作品を広く網羅することで、『竹取物語』と『うつほ物語』において「愛し」が特徴的に用いられていることを指摘し、その作品固有の世界との関連性を読み解いている。

鈴木孝庸の論文「平家物語の武装描写と平曲」は、「那須与一」語りのうち武装描写に注目し、平家物語の中で登場する同種描写の定型を確認し、「ことば」の表現と「語り・音楽」の表現の繋がり具合を検討し、ひとまとまりの〈語り〉として、それぞれがどのように評価できるのかということ考察している。